

## 特別寄稿

# 昭和館の役割と収蔵資料への期待

宮脇 岑 生

はじめに

昭和館が開館して十年目を迎えることになった。開館記念式典が花輪館長のもとで行われ、あつという間に歳月が過ぎたという感じがする。

その間、運営専門委員長として、昭和館の運営に関していろいろかわってきた。どうしたら昭和館を一般の人に理解していただけるか、そして一人でも多くの人が来館していただけるかが委員会の毎回の話題であった。今日では、非常に多くの方が来館し、利用されるようになり、昭和館もこの十年間で非常に発展し、国内的にも理解されるようになってきたと感じている。

この間、絶えず気になっているのは「昭和館」という名称が一般の国民の方に理解していただいているだろうかという点である。昭和館は設立趣旨が、戦中・戦後の労苦を後世に伝えるという点にあるが、この「戦中・戦後」をどのように捉えるのかという問題があった。学生に昭和館を紹介した時、「昭和館」という以上は、“昭和の初めから最後までを扱うのが昭和館ではないのか”という基本的な疑問が必ず出されるからで

ある。

また、「戦前・戦後」「昭和」という言葉があっても、今の小・中学生、場合によっては高校生でも「戦後とは何か」ということの認識が最初



写真1 式典写真

から問題であった。我々戦前の人間にとつては常識的に「戦後」は第二次世界大戦後と認識しているが、高校生、大学生でも「戦後」の認識がされていないのが実情である。開館十年経って、昭和館に多くの学生も見学に来館しており、この問題も若干はクリアできているとも思える。

開館十年の中で個人的なことでも印象に残ること

を申し上げると、平成十七年が終戦から六十年ということで、昭和館をはじめ全国的にいろいろな行事が行われた。私も福生市（東京都）の公民館で「戦前・戦後を語る会」の企画に企画し、バスツアーで五〇人の参加者全員を昭和館に引率した思い出がある。見学した時、皆さんが「戦前・戦後」の体験した労苦が再現されていることに深く感動されたこと。そして、このような労苦を後世に伝えてほしいという強い要望があったことを思い出す。

本稿では、昭和館の開館から今日までの十年を振り返るとともに、昭和館が持つ役割や意義、さらに今後の期待を述べたいと思う。

## 一 二度二度訪れる常設展示室に

### (1) 常設展示

昭和館の七階・六階は常設展示室になっており、最初は陳列というところで、実物資料を並べて置くだけで、解説資料にあまりいいものがなかった。そのために見学者も理解しにくかったが、一点一点の資料に解説を付け、また全体の説明も付けることで展示の流れがわかりやすくなった。これは見学者にとっても大変素晴らしいことだったと思う。

日本でも世界でも多くの博物館・美術館の最初は実物資料を並べて置くだけだったが、一九六〇年代頃から、ただ単に見せているというだけでなく、理解してもらおう展示、すなわち「見せてやる」ではなく、「見ていただく」それから「理解していただく」展示と公開のあり方が変わってきている。今日の展示のあり方は変化しつつあり、参加型・体験型の展示が求められている。昭和館でも体験型の展示があり、それが展示の中でうまく機能しているように感じられる。子どもが楽しめる、もちろ

ん大人も楽しめる、体験できる、それがこれからの時代には重要になってくるであろう。

次に、解説資料は、子供用と大人用が常置されている。大学生から、子供用の解説資料を見ても非常に難しく、首を傾げるという率直な感想を聞いたことがある。しかし、この解説書があることで、じっくりと実物資料を見学することができ、家に帰ってから解説資料を読む、思い返すことができるという利点があり、その意味で解説資料は大変有効に利用できる。

一般に常設展示は一度見てしまえば、もう二度と来ないという印象が強いのではないだろうか。昭和館の十年を振り返ると、三年ごとに常設展示の切り替えが行われてきた。担当される職員の方のご苦労があると思うが、何年かおきにきちんと展示替えを行うということは、昭和館の新しいイメージを出していくという意味で極めて大切なことと考えている。さらに、展示替えをしたことをアピールする広報が重要であると思う。

### (2) 特別企画展

昭和館の特別企画展はこれまで二十四回開催されており、見るたびに担当職員のご苦労を痛感するとともに、今後は一層テーマ選びが難しくなるであろうと思われる。担当者だけでなく、いろいろな人から意見を聞くことや、そうした機会を設けるのも必要であろう。

特別企画展の中では、桑原甲子雄氏や石川光陽氏が撮影した東京の戦前・戦後の写真は一般の人にはなかなか見る機会がなく、素晴らしい企画展であった。また、オリンピックをテーマにした展示、なにより人気があつた手塚治虫の展示には大変興味を持った。

これらの展示に加え、図録が作られるようになったことも見逃せない。しかも一冊千円という安さで提供してもらえようになったのも嬉しいことである。図録『オリンピック ―栄光とその影に―』は写真よりも説明がかなり多く、写真や図などもっと多い方が良いと感じた。また、『手塚治虫の漫画の原点』はあくまでも漫画が中心で、そういう意味でも図録は写真や図が中心で良かったと思う。

地方巡回特別企画展も平成十三年から毎年二か所で行っている。全国各地で昭和館の常設展示を少し小規模にした展示会を開催しているが、これは地方の人たちにも昭和館を見て知ってもらおう、遺族会だけでなく一般の人たちも見学できる、という意味で大変貴重な事業である。他の博物館・美術館ではできない、昭和館ならではの事業と位置づけることができる。

また、昭和館の入口「資料公開コーナー」があるが、これは初めての来館者に、気楽に入れるという印象をもたせ、とても大事なことだと思う。美術館や博物館の入口はデンと構え、どこに来たのか分からないような感じを持つ所もあるが、昭和館の入口は一般の人を惹き付けるような印象を与えらると思う。

## 二 図書資料の収集と利用

### (一) 資料収集の難しさ

昭和館は戦前から戦後という時間的に制限された資料を扱うが、私がいた国立国会図書館（以下、国会図書館という）ではこの時期の資料が最も少ない。その前の大正期から昭和の初め、明治時代の資料はみごとになくらいに残っている。戦後も昭和三十年代以降になると、日本経済も

安定し、様々な出版物が図書館に入ってくるようになり、国会図書館でも資料が揃っている。昭和館は最も大変な時期の資料を専門的に扱うということで、それだけ期待が大きい。

図書の収蔵資料はまだ十万点でそれほど多いとは言えないが、軍事関係の資料は、他の一般の施設ではあまり収蔵していないであろうし、国会図書館にもない資料を昭和館は数多く収蔵している。そういう意味で図書館の機能を備えた昭和館が、戦前から戦後の専門的資料をさらに充実させていくことを今後も期待したい。

軍事関係の資料をはじめ、昭和館が収蔵すべき資料は、自費出版のものや印刷部数が少ないものなどがあり、大変難しい問題がある。まず、資料を収集するには専門家を含めて、組織立って進めることが大切になつてくると思われる。また、資料の取舍選択にはあまりこだわらず、関係する資料をできる限り集めるという方針で、評価の問題はその次で良いのではないかと考える。

国会図書館には法律上の納本制度があるが、それでも自費出版などは集まらないのが現状である。納本以外には寄贈や、所有権を移さずに事実上は半永久的に預かる寄託という制度がある。昭和館が寄贈、寄託を大々的にPRして資料を集めるという方法もある。また、古本屋さんに戦前・戦後の関係資料があれば自動的にリストを送ってもらうのも一つの方法であろう。昭和館が収集しようとする戦前から戦後の資料は集めにくい資料があるため、組織的に網羅的に、内容もできるだけ価値判断をつけずに収集していくことが重要だと考える。

### (二) 利用者からみた図書室

利用者というのは、そこに何があるのかということが最大の関心事で

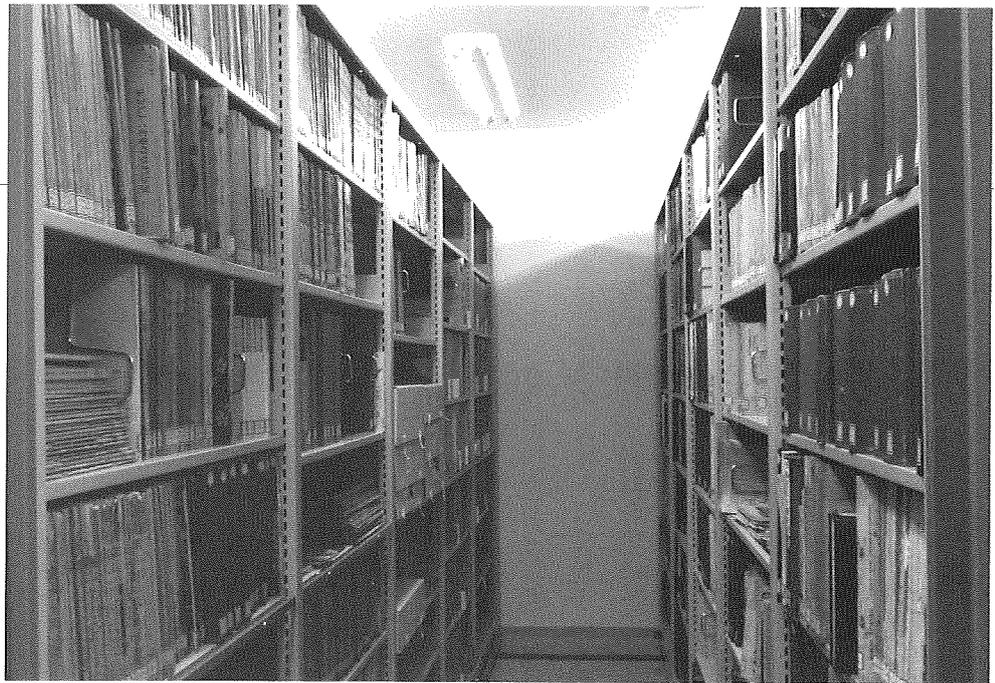


写真2 図書資料 上段：『戦史叢書』 下段：書庫

ある。したがって、資料の所蔵リスト、データが利用者に分かりやすくなっていることが最も大切である。最近公共図書館や大学の図書館は独自に資料のデータベースの整備を行い、インターネットで利用できるようになってきている。しかし、来館利用者は減少の傾向にある。データ

検索」ができるようになっており、昭和館の特徴であると思う。だが、ホームページではタイトルと編著者名、出版社、出版年での検索だけであり、図書室のようにキーワードで検索ができれば利用者から見てさらに便利になることと感じている。

ベースが充実すればするほど、一般の利用者は来館しなくなる。だが、インターネットで利用する人を含めて考えると、利用数は格段に増加している。

昭和館も利用者が増えるが良いが、データベースが充実すればするほど、利用者が減少するという皮肉な結果になるかもしれない。データベースの充実も必要であり、利用者を増やすことも重要であり、難しい問題である。

昭和館の図書室では図書・雑誌の検索が書名や編著者名、出版社、出版年だけでなく、「ことば

また、国会図書館には雑誌記事索引があるが、それは昭和二十三年以降のものだけである。雑誌は一般に出ているものの半分にも満たない。特に戦前・戦中となるとほとんどない状態である。昭和館は戦中・戦後の貴重な雑誌も若干収蔵しており、昭和十年代から二、三十年代の雑誌記事索引が作られると利用者にとって便利になると思う。

(3) 図書資料の保存と公開

資料の保存という問題は、図書館、博物館、美術館でも非常に大きな問題である。特に昭和館が主として扱っている戦前から戦後の紙資料は、日本の歴史上で最も紙質が良くなり、さらに古い資料は酸性紙が多く、劣化していくことは避けられない。また、利用者が増えれば資料の破損も進行するという皮肉な結果となる。

こうしたことから、国会図書館では明治期の資料をはじめ、戦前・戦後の資料を最優先してマイクロ化を始め、後にデジタル化を行い、インターネットで見られるようにした。現物の資料は余程のことがない限り利用しないようにし、マイクロ化したもの、あるいはデジタル化したものを利用してもらおう方針で、現物の資料の保存に努めている。

現物の資料は、紙質の悪さから、触れるだけでポロポロと欠け落ちてしまうが、その原因は紙の酸化にあると言われている。そこで、費用はかかるが、化学的な処理、すなわち脱酸処理を行うことで資料の保存対策を進めている。

書庫の温湿度を一定にして保存管理することは当然のこととして、語り継ぐべき現物資料が資料としての役割を果たせなくなってしまうので、状態の悪い戦前・戦後の資料の保存対策は是非とも早急に行わないといけないと思う。

(4) デジタル資料の充実に向けて

昭和館では『写真週報』『中央公論』『婦人公論』『改造』等の雑誌をデジタル化して、利用者が閲覧できるようになっているが、他の図書館にはない戦前の海軍や陸軍の部隊関係資料は、新しく復刻版が刊行されない限りは、現物資料の利用は考えた方がよい。大変貴重な資料が多いので、デジタル化をして、利用者が閲覧できるようにすべきであろう。

私が国会図書館にいた時、軍人の経歴のレファレンスがあった。上級の将官級ならば調べられるが、佐官級になると非常に難しくなり、その下の軍人になるとなお調べることができなくなり、回答することができなかった経験がある。戦前の軍関係そのものの資料を昭和館では扱わないということであるが、昭和館ができるかぎり資料を収集し、個人情報保護の問題に配慮し、デジタル化することが必要かと思っている。

資料のデジタル化では、戦後、アメリカが日本から持ち帰った資料で「プランゲ文庫」というものがメリーランド大学にある。同文庫はGHQによる戦後の検閲資料であり、図書、雑誌、新聞等の他パンフレットが含まれ、戦後の貴重な資料であり、カラーのものも素晴らしい状態で残っている。国会図書館も早くから努力して現物の返還をメリーランド大学にお願いしたが、同大学の宝物であり、一つの目玉であるというところで離さない。戦後のものは紙質も良くなり、新聞を中心に図書の一部はマイクロ化が進められ、国会図書館でも所蔵している。全体のマイクロ化はできていないが、いろいろな施設がプランゲ文庫のマイクロ資料導入を考えているようだ。そのマイクロ資料や複製品が昭和館に収蔵されるようになると素晴らしいと思う。

(5) これからのデジタル・アーカイブ

利用者はホームページからどのような資料があるかを検索し、その資料があれば来館し、ない場合には来館しない。それでも検索ができるようにしておくことは非常に大切なことで、たとえ検索したものが収蔵していなくても、また次に検索し、資料があれば来館して利用してもらえようになる。デジタル・アーカイブで情報を公開することは非常に困難なことではあるが、これからの昭和館を考えた場合、一番大事なことは何かと考える。

デジタル・アーカイブというものは、今や国内だけではなく、国外からも期待され、その充実のため国際的な協力体制がとられている。昭和館の今後を考えた場合、デジタル・アーカイブの分野の充実は是非ともめざしていく課題と言えよう。

昭和館のこれから—おわりに—

昭和館がこれからはますます発展していくことを願い、今後期待していることを述べ、おわりとしたい。

昭和館の特徴は、目的が「戦中・戦後の国民生活の労苦」を伝えるという、極めて時間的にも空間的にも限定されている点にある。他の博物館は時間的にも内容的にも無限であることが多いことから比べると、昭和館の展示や資料の収集・保存などに大変困難がともなうと思う。だが、昭和館の今後の発展には、昭和館のデータベースを含めて内容、中身を充実することが重要なことと思う。一度行ったらもう昭和館には行かないというのではなく、様々なことを通して昭和館にまた行く、行きたくなる、そう思ってもらえるように内容を充実し、デジタルアーカイブや

サービスの充実を図ることが重要なことと思うのである。そのためには、利用者の意見を十分に聞き、昭和に関する研究、戦前・戦後に関する研究など、利用者の研究を発表する会を作るなど、いろいろな形で昭和館が世の中に出て行くの良いのではないかと感じている。

本誌『昭和のくらし研究』の各論文は貴重であり、充実した雑誌であるが、それに投稿制度を入れ、右のような研究会や個人から多くの原稿が投稿されるようになればさらに充実した研究誌となるのではないだろうか。

プロフィール

—宮脇岑生（みやわき・みねお）昭和十三年北海道生まれ

立教大学法学部卒業。

国立国会図書館入館、元国立国会図書館副館長。現在、流通経済大学法学部教授。昭和館運営専門委員会委員長。

著書：『アメリカ合衆国大統領の戦争権限』（教育社）『現代アメリカの外交と政軍関係』

（流通経済出版会）ほか。

